



## 北朝鮮の6回目核実験 技術的意図と政治的意図



金東葉  
慶南大極東問題研究所教授  
donykim@kyungnam.ac.kr

9月3日、北朝鮮が電撃的に6回目の核実験を強行した。昨年9月9日の5回目の核実験以来、約1年ぶりとなる。今回の核実験はこれまでの5回の核実験とさまざまな側面から比べられる。技術的側面や政治的意図の側面から、前回の核実験とは次元が異なる。5回目の核実験まではさまざまな政治的意図があったが、北朝鮮が核兵器を開発するための技術的な必要性が持つ意味が大きかったとみられる。しかし、今回の6回目の核実験は技術的必要性と政治的意図が共存する。現在の北朝鮮の核問題を理解し、今後の進行状況に対する予測と対応を講じるためには、2つの側面の両方に関する正確な分析が求められる。

北朝鮮は核実験直後、「大陸間弾道ミサイル(ICBM)搭載用の水爆実験に完全に成功した」と発表した。韓国気象庁が発表したマグニチュード(M)5.7の地震を基準とし、韓国国防部は爆発力威力を50キロトンと推定した。5回目の核実験の5倍、日本に投下された2つの核爆弾に比べても約3倍の威力である。

だが、今回の実験が水爆かどうかをめぐっては疑問の声も出ている。M5.7の地震や50キロトンだけでは、完全な水爆とみるには威力が足りないというのだ。地震波だけでは断定しにくい。核実験を行った地域と遮蔽状態によって外部に伝わるエネルギーが軽減される可能性がある。すでに一部ではM6.0以上から6.3まで、との見方を示している。これは300キロトンに達する強力な威力である。核実験により、坑道が崩壊されたとの情報まで出回っている。

国防部の推定通り、今回の核実験の規模が50キロトンだったとしても、これが北朝鮮が持つ核兵器の威力の最大値とは断定できない。北朝鮮が安全を考慮し、意図的に爆発力を抑えて実験した可能性もある。北朝鮮は核実験後の発表で、「核爆弾の威力を打撃対象と目的によって任意に調整できる高い水準に到達した」と主張した。

50キロトンというすさまじい爆発威力を確認したため、これが水爆だったのかどうかはそれほど重要でないかもしれない。これだけでも脅威と恐怖感は想像を絶するものである。しかし、核兵器は単純に核爆発物だけがあっても成り立たない。これを運べるミサイルが欠かせない。ミサイルに搭載できるよう、小型で軽量に製造しなければならず、このためには水爆技術が極めて重要である。

もし、6回目の核実験に使われた核爆発装置が、北朝鮮が当日にメディアで公開したひょうたんのような形をした物体と同じものであれば、米本土まで飛ぶICBMに搭載できる50キロトンの威力を持つ爆発物を保有したという意味である。技術的には頂点に立ったといえる。6回目の核実験が北朝鮮の核兵器開発において技術的には最後の核実験になる可能性が高い。北朝鮮が見せる次の段階は「火星14」に搭載し、遠くの太平洋まで(5000キロ以上)飛ばすことかもしれない。

これまで北朝鮮の6回目の核実験の可能性は何度も提起されてきた。金正恩(キム・ジョンウン)朝鮮労働党委員長の指示さえあればいつでもボタンを押すとの情報まであった。それにも関わらず、国際社会は6回目の核実験に踏み切ったことに困惑を隠せず、北朝鮮がこのタイミングで核実験を断行したことは理解できないとの声もある。核実験には踏み切らないと主張した側は自身が希望するよう解釈したのではないか。逆に核実験を実施すると主張した側も論理的な根拠を示せなかった。なぜ実施に踏み切ったかを理解しない限り、次は予測できず、対応も不可能となる。6回目の核実験に関する技術的側面の分析と同様、政治的意図へのアプローチが重要な理由である。

北朝鮮が依然として米国と解決すべき問題があることから、北朝鮮が6回目の核実験で米朝間の駆け引きの場を放り投げたわけではないとみられる。トランプ政権が発足してから7カ月が過ぎたが、米国は計画された行動や政策より、依然として言葉だけを繰り返している。現在のトランプ政権に対する北朝鮮の期待水準や米国との駆け引きの出発点をいつに見るかによって、6回目の核実験のロードマップが変わってくる。これが北朝鮮がこのタイミングで6回目の核実験を実施した意図について2つの解釈できる理由である。

まずは、依然としてトランプ政権に対する期待感が残っていると見る観点である。北朝鮮がトランプ政権の実質的な行動を引き出すため、核実験という極端な方法を選んだというものである。ミサ

イル発射だけでは米国を交渉テーブルに引き出すことは難しいと見て、核実験というカードを切り出したというなら、むしろ北朝鮮の焦りが反映されたもといえる。

もう一つは、当分の間トランプ政権が交渉か対話に乗り出す可能性がないと判断し、核実験を強行したという観点である。これ以上、トランプ政権を待つことは無意味と見て、認められかどうかとは関係なく、核保有国の地位を確保できる最大限の核武力を完成させ、逆に米国に交渉を提案するなど宥和策を展開する可能性もある。これは北朝鮮の強い自信に基づくものである。

この2つのうち、6回目の核実験の政治的な意図がどちらにあるかによって、北朝鮮の今後の行動のレベルや速度が異なるとみられる。前者のよう、トランプ政権に依然として未練があれば、レベルや速度を調整しながらサラミ戦術を用いる可能性が高い。一方、後者なら、米国と関係なく新しく打ち立てた自分たちのスケジュールに則ってマイウェイを突き進むとみられる。

米国や韓国が手をこまねいていれば、北朝鮮は今後、今回の核実験で使ったものをICBMに搭載し、南太平洋に飛ばす可能性もある。米戦略兵器が飛ぶと、グアムへの包囲射撃の可能性は依然有効となり、図面だけをちらっと公開した新型SLBMの「北極星3」とICBM「火星13」も飛ぶかもしれない。ただ時期の問題であるだけだ。

北朝鮮が意図がどちらにあるにせよ、重要なのはトランプ大統領の考え方と判断である。今の状況ではどのような場合であっても北朝鮮が差し出した手をトランプ大統領が握るかについては疑問が残る。しかし、予測不可能なトランプ大統領がどのような選択をするかは分からない。米朝関係変化のきっかけは、北朝鮮側の挑発中止よりは、トランプ政権が当面の問題を片付け、北朝鮮問題に実質的な関心を持つ余力がいつ生じるかの問題である。

北朝鮮が6回目の核実験まで実施したため、米朝関係に新しいことが起きないと断定することは愚かな考え方である。プライドの強いトランプ大統領も大義名分さえあれば、いつでも商人に転身する可能性がある。恐らく、その時期になれば韓国に通告はするとしても、同意を求めたり協議したりすることは期待しにくい。その状況で北朝鮮が米朝関係の障害物を取り払うため、韓国に対しても会談を提案するかもしれない。核武力を最高水準まで高め、投げかけた対話の提案に米国が応じなければ韓国に対話を提案する可能性がある。

その際、果たして韓国政府はどのように対応するのか。韓国の安全保障担当者らがこれまでの慣性から抜け出し、熟慮しなければならない理由である。

MORE ARTICLES

—上記の内容は著者の意見であり、極東問題研究所の公式な立場を示すものではありません。  
—メールリストに登録をご希望の方はお名前や電子メールアドレス、所属先を下記のメールアドレスまでお送りください。 [ifes@kyungnam.ac.kr](mailto:ifes@kyungnam.ac.kr)

You can remove your email address from our mailing list by clicking link below

[\[No longer receive e-mail\]](#)



경남대학교 극동문제연구소  
The Institute for Far Eastern Studies

COPYRIGHT(C) 2010 IFES ALL RIGHTS RESERVED  
2(Samcheong-dong) Bukchon-ro 15-gil, Jongno-gu, Seoul 110-230,  
Republic of Korea  
TEL. +82-2-3700-0739 FAX. +82-2-3700-0707  
EMAIL. [ifes@kyungnam.ac.kr](mailto:ifes@kyungnam.ac.kr)